

上智大学理工学部 現代 GP
グローバル社会における系統的科学英語教育
「科学英語教育フォーラム」報告書

1. 開催日時, 場所

2007年1月20日 10:00-17:30

上智大学 2号館 1702 会議室

2. 概要

開催要項に基づき総合講演が二つ、および平成 17 年度現代 GP「(テーマ) 仕事で英語が使える日本人の育成」で文部科学省に採択された 11 大学(短期大学を含む)のうち 7 大学からの報告講演が行われた。(北陸先端科学技術院は講演が予定されていたが入試業務との調整がつかず取り止めとなった。)

総合講演として、まず Mari-Jo P. Ruiz 教授 (Ateneo de Manila University) がフィリピンの地理、歴史の説明からはじめ、英語とフィリピン国民がどのように関わってきて現在に至っているか、現在 Ateneo de Manila 大学では、どのような英語教育が行われているか、について講演を行った。

またフォーラムの締めとして、本学の吉田研作教授が「コンテンツベース外国語教育の基本的考え方 カミンズの考え方を基に」と題した講演をされ、適切な二つの尺度を用いると教え方のモデルが 4 つ考えられ、どのモデルを使うかの意識的選択が大切であるということを中心に話をされた。

7 大学の講演の内、3 大学(北星学園大学短期大学部、麗澤大学、南山大学)は文系でどの大学も特色のある取組をしていることが報告されたが、特に英語を自ら使う環境作り(学内の英語ラウンジ、交換留学など)また教育の成果の評価法に様々な工夫をされていることが参加者の印象に強く残った。

残り 4 大学は理系で、English for Specific Purpose (ESP) と分類することができる。東京女子医大からは、まず”I’m your doctor. How may I help you?” と話せるようにするという取組が報告され、東京海洋大学からはビデオを用いて実際に船上で使われる海事英語教育の例が示され、また世界に共通な海事英語検定試験を開発する意欲的な取組が報告された。

群馬大学工学部および上智大学理工学部からは理工系の学生に対するプログラムの紹介で、群馬大学からは、とにかく英語でまず話す、上智大学からは系統的なカリキュラムの作成、という点を中心にして報告が行われた。共通していることは理工系の学生は文系の学生よりは教室において英語で話すことには消極的な傾向があり、学会発表など、将来実際に英語を使う場に近い形で参加させることを行っている点であった。

また、ESP の専門家である小野義正東京大学大学院教授が終日参加をされていたため、開催者から強いてお願いして小野先生の英語の勉強教育歴、および現在の大学院生に対して行っている英語教育について短時間ではあったが話をいただいた。

参加された方は朝の10時から夕方5時過ぎまで熱心に聴講され、質疑応答も活発であった。参加者には好評であり、中身の濃い情報交換が行われた。

3. まとめ

① 成果

平成17年度現代GP「(テーマ) 仕事で英語が使える日本人の育成」で文部科学省に採択された11大学(短期大学を含む)のうち7大学からの取組担当者の報告講演をじかにうかがうことができ、各大学がそれぞれ工夫をこらして、取組んでいる様子を知ることができた。また英語を公用語として日常的に使っているフィリピンの例、および英語教育の専門家である吉田(上智大学)教授、小野(東京大学大学院)教授のお話もうかがえ、幅広く、英語教育について考えることができた。

② 今後の事業への反映

本理工学部の取組として、より積極的に学生が英語の使用に参加できる環境を作ることを、日常の教育の場は勿論、交換留学の場をより有効利用することも視野にいれ、考えていきたい。また教育効果の評価についても、検討をする必要がある。

③ 参加者

43名(すべて大学関係者、上智大学外17名、学内26名)